

## 『賀茂保憲女集』の研究

保憲女の漢詩文受容と家意識

中 島 絵 里 子

『賀茂保憲女集』は、保憲女という一人の女性が、平安時代中期に確かに生きていたことを示す唯一の証であると言ってもよい。生涯を賀茂家で過ごし、当時の歌壇との直接の交渉も見出せない保憲女は、長大な序文を持つ独特の家集を遺すことで、千年の間その名を留めてきたのである。

以前、保憲女の発想と漢詩文の関わりについて考察し、保憲女の和歌が『千載佳句』の表現を踏まえていたり、また、序文、和歌に見られる捕えられる動物という発想が、漢詩文の影響によるのではないかということ指摘した(注1)。そうした保憲女の漢詩文の素養は、彼女の学問に対する積極的な姿勢を伺わせるものだった。今回は、更に『保憲女集』に見られる漢詩文の素養を指摘し、また、それと関わる保憲女の家意識について検討することにした。

一七九 なみだもておもひつづけしみづぐきのふでのうみともなりにけるかな(注2)

「涙を流しながら、絶えず思い続けた私の歌々が、筆の海とも呼べるほどに多くなつてしまったことです。」というこの歌には、胸にあふれる思いを歌にしていった保憲女の心情が読み取れるが、第

『賀茂保憲女集』の研究 —— 保憲女の漢詩文受容と家意識 ——

一の序文の次の表現を見てみる。

しづのをだまきくりかへし、いやしき心一つを千種になして、言ひ集めたれば、あるは四十文字、あるは二十文字などして言ひ集めたれば、三十文字にだに続くること難きを、取り集めたれば、淡海の海の水茎も尽きぬべく、書き集めば、陸奥の檀の紙もすきあふまじく、心にいることのはのあはれなみは、起くと伏すみ思ひ集めたることも、涙に朽たし果ててんと思へど……

「淡海の海の水茎ほどの数の筆も尽きてしまふ」また、「陸奥の檀の紙も漉くのが間に合わない」ほどの多くの歌を詠んだことが記されており、「海」「水茎」「涙」など、和歌と共通する用語の使用が見られる(注3)。

そして、一七九番の歌の「ふでのうみ」という表現は、『保憲女集』以前の歌には用例が見出だせない。そこで漢詩文を見てみると「筆海」という言葉を見出すことができた。

① 『李善注文選』「上文選注表」

拳中葉之詞林 酌前修之筆海

〔文選〕藝文印書館

② 〔盈川集〕

〔原州百泉県令李君神道碑〕 楊炯

文場筆海 焯爛等於星辰 班固談叢 鏗鏘協於風雅

〔四庫全書〕

③ 〔駱丞集〕

〔秋日送尹大赴京師〕 駱賓王

請振詞鋒用開筆海 人為四韻用慰千秋

〔四庫全書〕

楊炯と駱賓王は唐の詩人で、王勃、盧照隣らと共に四傑と称されている。

そして、この「筆海」はわが国の漢詩文にも使用されている。

④ 〔懷風藻〕

〔秋日於長王宅宴新羅客〕 從五位下大學助背奈王行文

嘉賓韻小雅 設席嘉大同 鑿流開筆海 攀桂登談叢

〔古典文学大系〕岩波書店

⑤ 〔田氏家集〕

〔夢高侍郎〕 島田忠臣

愁興寒燈向背燃 筆海馮君為此目 長悲片月早歸泉

〔小島憲之氏〕田氏家集注 卷之中〕和泉書院

⑥ 〔紅史部集〕

〔觀右親衛藤原相述懷詩不改本韻依次奉和〕 大江匡衡

觀衛一名將 工詩稟自天 花詞裁似錦 風骨軟於錦 筆海珠初

出 學山金暗捐

〔群書類從〕〔文筆〕

⑦ 〔本朝文粹〕

〔七言北堂文選竟宴各詠句得遠念賢士風〕 菅三品

遂使詞賦箴頌、弁玉石於學山之阿、引序篇辭、分溼漚於筆海之

岸。

〔新日本文学大系〕岩波書店

「保憲女の「ふでのうみ」が、これら漢詩文の「筆海」の日本読みであることは明らかであろう。

『本朝文粹』にとられていた菅三品、菅原文時の漢詩文の表現「光傾暮山之嶺、遊魚疑沈鉤於碧浪」と保憲女の第二の序文（四季の序）の「水にやどれるかげを、いをはおづ」という表現が、共通していることは、以前に述べたが（注4）、この「筆海」も文時のものに見られるということは、注目するべきであろう。

そして、『保憲女集』以降には、『新古今和歌集』の仮名序に用例が見られた。

万葉集にいれる歌は、これをのぞかず、古今よりこのかた七代の集にいれる歌をば、これを載する事なし。たゞし、詞の苑にあそび、筆の海をくみても、空とぶ鳥のあみをもれ、水にすむ魚のつりをのがれたるたぐひは、昔もなきにあらざれば、今も又しらざるどころなり。

『保憲女集』の「ふでのうみ」は、「筆海」を「ふでのうみ」として用いた最も早い例であり、漢詩文の用語を和歌に取り入れるという保憲女の作歌態度を伺せる。

保憲女のこうした漢詩文の素養は、育った賀茂家の環境によると

ころが大きいといえるだろう。

作者の父保憲は、陰陽道において様々な活躍をし、名声を得ていた人物であり、官位も従四位下にのぼっており、嫡子光栄は曆道を父より受け継ぎ、従四位上にのぼっている。また保憲の弟、保憲女の叔父としては保胤、保章、保道等があり、保章とその息子為政は文章博士となっており、保胤は菅原文時のもとで文学を志し、「池亭記」や「日本往生極楽記」を著した文名高い人物である。

保憲女は、こうした、学問をするには恵まれた環境で、女性でありながらも漢詩文の知識を吸収していったのである。そして保憲女は、第四の序文に自らを客観的に「かもうちなるをんな」と書いている。

此歌は、天の御門の御時に、瘡瘡といふものおこりて、やみけるなかに、かもうちなるをんな、よろづの人に劣れりけり、さる中に、ただ瘡瘡をなむすぐれてやみける

三田村雅子氏や久保木寿子氏によって、すでに保憲女への影響が指摘されている曾祢好忠(注5)は、「毎月集三百六十首和歌」の序に、

：人はかしこき 顔をつくり われははかなき 事を残しおきて 花散る 春の朝 木の葉の落つる 秋の夕 月のあきらけき 夏の夜 風のさびしき 冬の暁までに しるせる事は、をこなれど 親のつけてし 名にしおは、なを好忠と 人も見るがに(注6)

と、自分の名前を記しているの、保憲女はこの影響を受けたのかもしれないが、自分を語る時に、名前や家系について触れること

なかった平安女流文学の中で、執筆契機の序とも呼ばれる第四の序文に、こうして素性を明かしたところに、彼女の並々ならぬ思いが感じられる。

保憲女はこの歌集を編んだのが、他の誰でもない「賀茂氏の女」であることを読者に知ってほしかったのである。それは、自分が賀茂氏の人間であるという、強い氏族意識に基づくものであろう。

また、自分の周辺の特定の読者をまず意識して書かれた当時の女性文学とは異なり、歌壇との直接の関わりが見出せない保憲女は、自分の家集の読者が、後世の人たちであることを予測して、素性を書き記しておく必要を感じたとも言えよう。

そして、対句表現が多く用いられ、漢文訓読調の語彙の使用も見られ、保憲女の思想が綴られている序文は、女性のものである、かなり特異であり、むしろ男性的でさえある。それも、優れた陰陽家や有名な文章家を輩出している賀茂氏の女としての自覚と自負を感じさせる。

しかし、保憲女は学ぶ意欲と知識をもちながら、生涯を賀茂家で過ごしたものと思われる。外の社会で活躍する親族たちを目のあたりにしながら、家に居続ける事しかできなかった保憲女……彼女は、そのことをどのように感じていたであろうか。兄弟と自分を比較した表現を、集中唯一の長歌に見ることができ

一九四 ちぎりあれば いかのがれん むまるとも かひこめく  
ちて 鳥の子の かへりては身の うき事を 親のむすべ  
る 心のうちに つかあぢはひ くくむごと なくなく  
こもり 有りければ おのがふねふね おひたちて かく

れし親の 羽衣 みな忘られて 飛びならひ あるは賢く  
なる菓子の 賢き鷹と 名をふるひ あるははかなく  
すらへて 立つと居るとに 思ひつつ 嘆きの下を 下り  
上り 今やはかなき 死にすると さへづる声を 聞く人  
はいそひするとや 思ふらむ あはれかなしき 我が身  
かな……人なみならで ひととなり 物思ふことは 大沢  
の 生けるかひなしと 思ひつつ…

この歌では、自分や兄弟を鳥に譬え、「あるは賢くなる菓子」は兄弟を指し、彼らは「賢き鷹」として名声を得ているが、自分は「はかなくさすらへ」る存在でしかなく、嘆きの中で日々を過ごし、もうすぐはかなく死んでしまう、そしてそういう自分を「あはれかなしき我が身かな」と詠んでいる。

三田村雅子氏は、「他の兄弟達の羽振りのよさが一層彼女のみじめさを際立たせるものとなる。」(注7)とされ、久保木寿子氏は兄弟達の活躍は「彼女自身の不如意な生を対照的に明確化するものだった。」(注8)とされている。

保憲女は、同じ家に生まれながらも、女性である自分は、外の世界にはばたくことができないということ、はつきりと認識していたのである。そして、そういう立場の自分を「人なみならで人となり」人並みではない、と言ひ、生きる甲斐がないとまで思っている。家に留まるしかなかった保憲女は、自分自身を家族と比較して矛盾を感じている。そういう保憲女の家に対する意識を、「ひを」を詠んだ歌から読みといてみたい。

あじろのひをを、うちにて

一八五 さまざまもかはらでなみはあじろぎのおなじうちなるいを  
にぞあるべき

一八六 すまひぐさほてふくかぜにふきつづらなにぞしるらんさだ  
めなきよを

一八七 かたわきて吹く風によるすまひぐさ露にうつるぞかひな  
りける

一八八 よにいらてつきのかげさすまきのはゆふつけどりのふね  
もあける

一八九 人めなきやまにもみとはいれつれどかくれぬものはうきき  
なりけり

ひをのかへし

一九〇 はやきせもあさきはたがふおなじうちもひをぞかばねをと  
らぬなるべし

雑の部立に位置している歌である。考察の対象は「ひを」を詠み込んだ歌、一八五番と一九〇番である。

「ひを」は辞書を引くと、鮎の稚魚と記載されているが、『和名類聚抄』には、「鮎音小 今案俗云氷魚是也 白小魚名也 似鮎魚長一二寸者也」と書かれているだけで、当時の人々に氷魚が成長して鮎になるという認識があったかどうかは疑わしい。また、当時の「氷魚」が、鮎の稚魚であったかどうかについても、疑問を感じないわけではないのだが、とにかく『和名抄』に書かれているように、長さ一、二寸の白魚に似た小魚を「ひを」と呼んでいたであろう。

なお『延喜式』卷三九「内膳司」によると、供御の魚として、毎年九月から十月の間、献上されていたこともわかる。

『保憲女集』より以前には、『万葉集』に一例、『後撰和歌集』に一例、『大和物語』に二例、『蜻蛉日記』に五例見られ、またそのほとんどが、水魚を捕るための仕掛けである網代と共に詠まれている。

一八五番であるが、詞書は「網代の水魚を宇治にて詠んだ歌」である。上の句の「様も名も変はらで波は」がどこへ続くのがよくわからない。他の用例は見出せないが、「あじろぎの」の「あ」に「波はあり」の「あ」を響かせて、「様も名も変はらで波はあり」として考えられないだろうか。或いは、「あじろぎの」とばして、「同じ」に続き、「さまざまもかはらでなみはおなじ」と読み取れないだろうか。

いづれにしても、この上の句には、次に挙げる第一の序文の表現が参考になる。

大きなる川、小さき川も、波の様へだてなしと思へど、人より劣れる人の、すぐれたるざえあらはることかたしといへど、人に勝りたる人の劣りするざえは、劣りたる言の葉のおもしろきにはあらず。

身分が低い人の才能は世に表れにくい、身分の高い人の劣った才能の劣った言葉はおもしろくない、と訴えている部分であるが、傍線部は「大きい川も小さい川も、波の様に違いはない。」と述べている。

つまり、「様も名も変はらで波は」は、「波はその様子も名前も変わらない、大きい川でも小さい川でも波は波である」と解釈できるだろう。

下の句の「あじろぎのおなじぢなるいをにぞあるべき」は、う

ぢに地名の「宇治」と、一族という意の「氏」が掛けられており、「網代木に捕われている水魚も、同じ宇治川にいる他の魚と同族の水魚であるはずだ。」と解釈した。

一首の意は「大きい川でも小さい川でも波は波であるように、波は、その様子も名前も変わらない。網代木に捕われている水魚も、同じ宇治川にいる他の魚と同族の水魚であるはずだ。」

水魚も、宇治川にいる他の魚と同じ魚であるはずなのに、「網代の水魚」として常に捕われている魚として描かれることへの慨嘆を読み込んだのであろう。

『保憲女集』には「いを」は和歌に三例が見られる。

二二 青柳の糸にやいをはかかるらむおろせるかげの網に似たれば

一二五 山川のいをを氷のとぢたるは風こそ網と吹き結びけれ

一七二 水もなき空に網はるささがにのかけれる虫をいをと見るらん

三例すべてが網と同出しており、三田村雅子氏はこれらを保憲女の「自閉感覚をうたう歌」とされている(注9)。序文には四例「い」が見られるが、そのうちの一例、第二の序文(四季の序)にも「こほりにとぢらるいをは、ふゆをむすべるあみとおもへり」という記述が見られる。保憲女の自由をなくした魚への関心の深さは、作者自身の内面を表しており、またそれは漢詩文の発想によるものではないかという指摘は以前にしたが(注10)、この一八五番の「網代木に捕われている水魚」も、家を出ることのない自分自身を象徴し、不満を述べたのではないだろうか。

またこの歌は、詞書が「あじろのひをを、うぢにて」であるので、実際に宇治で詠んだ歌かどうかという問題についてであるが、恋の歌の後に記された雑の序をまず、見てみたい。

しきのうた、こひ歌とはさるものにおきて、雑ぞいとあはれなる、<sup>①</sup>あるは旅ゆく人の、おもしろきところにつけて、またみづうみのかたつける山でらの心すこく、たふとげなるに、きのもとにめぐりて経をよむに、こゑのたふとくきこゆるに、<sup>②</sup>うみにあふねのこぎゆくおともあひて、あはれなるに、あるはこころほそきやどに、つれづれとあめのふるをながめたるをなむ、<sup>③</sup>まなこをばながるるみづにたとへり

傍線部①以降は旅についての記述になつてゐるが、「旅ゆく人」というように、客観的に語りはじめられている。

雑の歌を、一七一番より、一九四番の長歌まで見てみると、雑の序の言葉と対応する歌をあげることができる（注11）。

傍線部②、海や舟を詠んだ歌は、

一七一 しほならではちすのうみにこぐふねのおくのこゑをぞほにはあげつる（注12）

一七四 わたつみをなみのまにまにみわたせばはてなくみゆる世の中のうさ

一七五 伊勢のうみにもしほやくあまのかぜをいたみそらをしほむる君にぞあるべき

一八八 よにいれてつきのかげさすまきのとほゆふつけどりのふねもあけける

一九一 かぢのおとによるこぐふねはあはれなる人なみのあや

はかひなし

また、③、雨を詠んだ歌は、

一七三 雨ふればにはにきしろふうたかたをいづれかまつはきゆるとぞみる

一八二 にはたづみきしのみのこるあはみなにをのえくたすなごめなりけり

④、「まなこをばながるるみづ」つまり涙を詠んだ歌は、

一七七 そむけどもあまのしたをしはなれねばいづこにもよるなみだなりけり

一七九 なみだもておもひつづけしみづぐきのふでのうみともなりにけるかな

これら、序文と和歌の呼応、また、同じ言葉が、近接した歌に用いられていることから見ても、これらの歌は実際の経験というよりも、彼女の雑、旅というイメージから作り出され、ここにちりばめられている印象をうける。

武内はる恵氏は「保憲女集」の歌の歌題や表現に連続性、連想性が見られることから、この集の歌は、短期間に詠みだされたものであると指摘されているが（注13）、ここにもそれがあてはまり、よつて一八五番の歌も、実際に宇治に出掛けて詠まれたものと考えられる。保憲女が宇治の網代が描かれた絵を見たかして、その情景を、彼女独自の発想で、歌に詠み込んだ可能性の方が高いと考えられる。

続いて一九〇番であるが、「水魚の返し」という詞書が付されているので、一八五番の歌の返しであると思われる（注14）。ということ、一八五番は誰かに贈られた歌で、この一九〇番はその人物

の返しなのであるか。この歌までに、このように贈答歌という形のものはなく、すべて保憲女の独詠歌だと思われる。しかし、この歌より後、集の末尾近くの二〇四番から二〇八番に、贈答歌が見られる。

二〇四 身のあはにおもひくたせばめみかけてただすぎくれのころ  
もとぞ思ふ  
かへし

二〇五 ほどへてぞあみはかくべきすぐれのさるは身のあはにひ  
さしかるべく  
またかへし

二〇六 せきもあへぬたぎつ心をくれぐれといかが見なれてひさし  
かるべき  
人にむめをこひたれば

二〇七 あひおもふきみがためにはむめがえにをればいとど本ノマ  
マト云々

ただし、これらも相手の名前は記載されておらず、序文にも、それを知る手がかりになるようなことは何ひとつ、記されていないのである。

私はこれら四首については、他人との贈答の可能性もあると思うが、一八五番、一九〇番に関しては、贈答としては問題があると思う。一八五番の歌を読みといてみて、人に読みかけた歌と考えるには無理を感じるのである。また、この返しは一八五番の歌のすぐ後に記されず、間に四首の歌があり、それら、一八六番から一八九番の歌は「すまひぐさ」や「ゆふつけどり」などを詠み込んだ、「ひを」

とは全く関係がない歌である。先に述べたように、保憲女の歌は、短期間に次々と詠み出されていったと思うが、一八五番で「氷魚」を詠んだ保憲女が、続けて連作していく過程において、もう一度同じテーマについて発想しなおし、それを返しとして一九〇番に記したのではないかと考えている。

自分で詠んだ歌を返しとして記すと捉えるのは、歌の常識からは外れているかもしれない、しかし、第四の序文の次の表現、

わが身のはかなきこと、世の中のつねないこと、ながむるゆふべ、空にたまとる虫を詠み、ある時は、あまのたましひをかたりきて、歌合をして、勝ち負けは心ひとつにさだめなどしてぞなぐさめてあかしくらしける。

罹病中に、たった一人で歌合を心に思い浮かべて歌を詠んでいた保憲女を思うとき、自分で自分の歌の返しを詠んだという発想も、可能ではないかと思う。

それでは、歌を見ていきたい。「はやきせもあさきはたがふ」は一八五番の上の句を参考に考えたと「早い流れでも、浅いところは浅瀬と呼ばれるように、違いはある。」と解釈できる。「おなじうちもひをぞかばねをとらぬなるべし」であるが「ひをのかばね」であれば、『能宣集』に用例を見ることができ。

宇治の氷魚の使し侍る人の、昔かたらひ侍りける女のものにつかはせる

三八七 いしまゆく宇治の川波流れても氷魚のかばねは見せむと思ひき

これが返しして、えむ、氷魚はとどめじ、とまうせば、

三三八 生きたらばくらげの骨は見もしてむ水魚のかばねはよるか  
たによれ

これらの歌も、すこしわかりにくいので、増田繁夫氏の『能宣集  
注釈』(注15)を参考にして、解釈してみる。

三三七番の詞書は、「宇治の水魚の使いをします人が、昔仲良く  
していました女のもとに送った歌」、歌は、「岩間を行く宇治の川波  
に流されるように、時が過ぎてても、あなたに会えなくて、水魚の屍  
のようになつたわたしを見せたいと思つたのだ。」

三三七番の詞書は、「この歌の返歌を作つて、それをもらいたい。  
水魚はとどめてはおかない」と申すので、「歌は、「生きていたら  
くらげのほねはみることもしよう、でも水魚の屍は流れつくところ  
によればいい、わたしは見たくない。」

『元真集』には、歌句に異同はあり、「ひをのかばね」という語句  
ではないが、同じ贈答がとられている。

忘れたる人にいひにやるとて

三三二 あしまゆくちの河浪流れてもおのがかばねを見せむとぞ

思ふ

かへし

三三三 世にしへばくらげのほねは見もしてむ網代の水魚はよる方

もあらじ

これを見ると、『能宣集』の詞書にいう「宇治の水魚の使い」は  
元真のことで、『能宣集』三三七番は元真が、彼の元の妻に贈った  
歌で、三三八番はその妻の返歌を能宣が頼まれて詠んだのだらうと  
推測できる。

また、『元真集』三三三番は『夫木集』にもとられており、作者  
は元真と記載されている。ただし、四句目は「水魚のかばね」となっ  
ている。

忘れたる人にいひやる 元真

一三四三二 あしま行くちの川浪ながれても水魚のかばねは見せ  
むとぞ思ふ

「ひをのかばね」は『能宣集』では「水魚の屍」つまり、生きて  
いない水魚を指しているようである。

『保憲女集』以前の「かばね」という言葉について、用例を見て  
みた。

まず『万葉集』には、「屍」という漢字が詞書や左注に五例みら  
れた(注16)。長歌の用例をあげる。

四〇九四：海行者 美都久屍 山行者 草牟須屍：

なお、詞書、左注、歌ともに、人の遺体という意で用いられてい  
ることがわかった。

『宇津保物語』には、仮名書きの「かばね」が五例見られた(注17)。  
やはり人の遺体という意で用いられているが、中には「しろきかば  
ね」というように遺骨という意で用いているものもあった。

としかげ申す、「日本に年八十歳になるち、は、侍しを、みす  
て、まかりわたりにき。今はちりはひにもなり侍にけん。しろ  
きかばねをだにみたまへむとてなん、いそぎまかるべき」と申  
す。(一 としかげ)

『保憲女集』より以降の作品であるが、『源氏物語』には「葵」  
に一例、「宿木」に二例、計三例が見られるが(注18)、「葵」の用

例は急逝した葵の上の野辺送りを行なった後の次の表現に見られる。

夜もすがらいみじうののしりつる儀式なれど、いともはかなき御かばねばかりを御なごりにて、暁深く帰りたまふ。

「宿木」の用例は、大君の一周忌について薫から相談を受けた阿闍梨の言葉に見られる。

昔、別れを悲しびて、かばねをつつみてあまたの年頸にかけてはべりける人も、仏の御方便にてなん、かのかばねのふくろを棄てて、つひに聖の道にも入りはべりにける。

「葵」の用例は、火葬を行なった後であるので、「御遺骨」という意にとれ、「宿木」の用意も、袋に入れて首にかけているので、「骨」ととれるだろう。

以上、例をみてみると「かばね」という語句は、人が亡くなったあとに遺された亡骸（遺体も骨も内包した）を意味している言葉であることがわかる。

この、人の亡骸という意味でしか使われていない言葉を「水魚のかばね」として用いたところに、『能宣集』の歌の面白さがある。

『保憲女集』の「ひをぞかばねをとらぬなるべし」という発想も、この歌の影響を受けたのであろうか（注19）。

そうであれば、『保憲女集』の下の句は、「同じ宇治にいても（同じ氏族でも）生きていない水魚は、とらないようである。」という意にとれる。

「かばね」については、もう一案がある。『類聚名義抄』で「かばね」と読まれている漢字は、「骼・髀・尸・屍」であるが、「骼」と

『賀茂保憲女集』の研究 —— 保憲女の漢詩文受容と家意識 ——

いう漢字は、『説文』では、禽獸の骨の意であるとされている。漢字の知識のある保憲女が、「かばね」を魚の骨の意として用いているとは考えられないだろうか。そうであれば、同じ宇治にいても（同じ氏族でも）、水魚は骨を採らない。骨を自分のものとしな、つまり骨を持っていないという意にとれる。

しかし、どちらにしても、「ひをぞかばねをとらぬなるべし」の「かばね」には氏族の「姓」がかけられ、同じ氏族でも、水魚は姓をとらない、一族としては認められていないようだ、ということ訴えていることには間違いないであろう。

この一九〇番は、一八五番の綱代木に捕われている水魚も、同じ宇治川にいる他の魚と同族の魚であるはずだ。」をうけて、「そうはいつでもやはり違いはあるのだから、仕方がない」といういわば諦めの心情を、返して詠んでいるのである。

保憲女は、第一の序文において、

①泥の中におふるを、はるかにその連卑しからず、谷の底に匂ふからにそのはちすいやしからず、宮の内の花といへども、咲くことは隔てなし

また、

②大きな川、小さき川も、波の様へだてなしと思へど、人より劣れる人の、すぐれたるさえあらはるることかたしといへど、人に勝りたる人の、劣りするさえは、劣りたる言の葉のおもしろきにはあらず

と述べており、これらは、基本的に人に貴賤がないことを訴えていると思われるが、この後には次のような叙述がある。

松のねのび、いつもおほかれど、夏の野にいでて引かず、あやめぐさおほかりといへども、春の子の日に引かず、同じくくらぶる駒といへども、賢きにはまけぬ、同じきかちゆみといへども、的に当たらぬは負けぬ、同じき相撲といへど、力弱きには勝ちぬとおもへば、いかでかへだてのなからむ

①、②のように主張していた保憲女であるが、現実はいつかりと見つめようとしている。子の日の松は、夏の野ではひかない、菖蒲草はたくさん生えていても、春の子の日に引かない；などといったあたりまえのことを列挙して、「どうして隔てのないことがあるだろうか」と結んでいる。

自分の疑問に、客観的な事象をあげることによって、論理的に自分自身を納得させようとする表現を見ることが出来る。一九〇番の歌も、同様ではないだろうか。

保憲女は、網代に捕われている水魚に、他の親族と同じ賀茂氏の人間であるのに、家の中でしか生きられない自分を重ね合わせて嘆き、しかし、その事実を受け入れて生きるしかないことも十分わかっており、歌に表したのだと思われる。

「名」「氏」「姓」という言葉の使用は、保憲女が「家」を強く意識していたことを伺わせる。

以上、保憲女の漢詩文受容の一例として「ふでのうみ」を、そして家意識について、二首の和歌を中心に考察した。

「ふでのうみ」という言葉を詠み込んだ歌は、保憲女の漢詩文の知識と、それらに通じているという保憲女の自負を感じさせた。そして、一八五番と一九〇番の保憲女独特の歌は、そのような知識を

得ながらも、当時の文壇と直接交渉することなく、たったひとり歌を詠み、家集を遺すことを試みた保憲女の家意識を物語るものがあった。

注

(1) 拙稿「賀茂保憲女集」の研究——保憲女の発想と漢詩文——」

（『新樹』11 平8・9）

(2) 以下に引用する本文は、『新編国歌大観』（角川書店 昭60）によるものであるが、適宜、仮名を漢字に改めた。

(3) 序文と和歌の呼応については、私も以前から重視し、述べてきたが、木村佳世子氏が「賀茂保憲女集の構成——二つの視点から——」（『小論』6 昭63・3）において、大変詳細に検討されていることを、久保木寿子氏の「賀茂保憲女集の形成試論——序と和歌の対応が示すもの——」（『白梅学園短期大学紀要』32 平8）により知ることができた。

(4) (1)に同じ。

(5) 三田村雅子氏「賀茂保憲女集の位相——鳥の表象・歌から序へ——」（『和歌文学新論』明治書院 昭57・5）

久保木寿子氏「賀茂保憲女集試論——初期百首と曆的觀念——」（『文学・語学』147 平成7・8）

(6) 神作光一氏・島田良二氏『曾杵好忠集全釈』（笠間書院 昭50・11）

(7) (5)三田村雅子氏論文。

(8) (5)久保木寿子氏論文。

(9) 三田村雅子氏「賀茂保憲女——水と空の凝視——」

〔解釈と鑑賞〕昭61・12

(10) (1)に同じ。

(11) 久保木寿子氏は(3)にあげた論文において、雑の序と対応する和歌として、一七三、一七七、一七九番歌を指摘されている。

(12) 一七一番の歌と雑の序の語句との対応は、筑紫女学院大学王朝文学研究会において小塩豊美氏(梅光院生)が指摘された。

(13) 武内は恵氏「賀茂保憲女集」考

〔古典和歌論叢〕明治書院 昭63

(14) このような詞書の用例として、工藤重矩先生に「源氏物語」「初音」の次の例を教えて頂いた。「小松の御返りをめづらしと見けるままに、あはれなる古言ども書きまぜて」(明石の姫君の、松を詠み込んだ返歌を指している。)

(15) 増田繁夫氏「能宣集注釈」

(日本古典文学会貴重本刊行会 平7・10)

(16) 正宗敦夫編「萬葉集総索引単語篇 漢字篇」(平凡社)により検索し、歌は「新編国歌大観」から引いた。

(17) 宇津保物語研究会「宇津保物語 本文と索引」(笠間書院 昭48・3)により検索し引用した。

(18) 池山亀鑑「源氏物語大成」中央公論社

(19) 他にも「能宣集」と「保憲女集」の共通する語句として「のどけさかげ」を見出せた。

一八九 ちりかかる花なき夏は鏡山のどけさかげぞまさるべらなる  
〔能宣集〕

一五八 まつといひてきみをみどりの色ふかくのどけさかげにち  
よはかくれん〔保憲女集〕

本稿は平成八年度西日本国語国文学会(於熊本県立大学)における口頭発表をまとめたものですが、席上、工藤重矩先生、今西祐一郎先生にご教示頂きました点については、再考いたしました。先生方に心より感謝申し上げます。